

月刊 さきがけ

秋田魁新報社発行 1945年～1950年

復刻版 全5巻・別冊1

◎解題 石川巧
◎推薦 高橋秀晴
◎刊行 2017年7月刊行開始

平和日本の再建と新日本文化の礎たることを目的とした本誌は、石橋湛山「秋田をスイスたらしめよ」の論説より始まった。広く知名の士を集めるとともに、秋田の風土に精通した有識者を中心に、五年間にわたり戦後秋田の文化高揚を担った。占領期東北地方の戦後文化・言説の形成を考へるうえで必携の総合文化雑誌を復刻!



戦後の
地方新聞・
雑誌シリーズ
4

占領期の歴史・メディア・世相に加えて、
文学・文化運動、および地域研究の基礎資料!

主要執筆陣

- | | | |
|-------|--------|--------|
| 青野季吉 | 斎藤陽二郎 | 奈良環之助 |
| 石川達三 | 榊山潤 | 野口富士男 |
| 石坂洋次郎 | 佐々木宗一郎 | 長谷川幸延 |
| 石橋湛山 | 佐藤春夫 | 福田豊四郎 |
| 市川房枝 | 里見弴 | 北條誠 |
| 伊藤永之介 | 沙和宗一 | 松田解子 |
| 荻原井泉水 | 釈道空 | 宮本百合子 |
| 勝平得之 | 辰野隆 | 三好達治 |
| 金子洋文 | 館岡栗山 | 武者小路実篤 |
| 河上徹太郎 | 檀一雄 | 室生犀星 |
| 北町一郎 | 千葉治平 | 森田たま |
| 窪田空穂 | 壺井栄 | 山岡荘八 |
| 小島彼誰 | 壺井繁治 | 鷲尾温軒 |
| 小牧近江 | 鶴田知也 | 和田傳 |
| 小松平五郎 | 徳川夢声 | |
| 小山いと子 | 中川一政 | |

三人社

月刊 さきがけ 1945年11月～1950年5月(全54号) 限定70部

第1回配本	第1巻	1945年・46年版	496頁	本体 40,000円+税 ISBN978-4-908976-21-6	2017年 7月刊行
	第2巻	1947年版	432頁		
	別冊	解題・総目次・索引	約100頁		
第2回配本	第3巻	1948年版	432頁	本体 60,000円+税 ISBN978-4-908976-25-4	2017年 10月刊行
	第4巻	1949年版	524頁		
	第5巻	1950年版	256頁		

●刊行予定 全2回配本 配本ごとの分売可
※原本提供 秋田魁新報社・秋田県立図書館

- ◎解題 石川巧(立教大学文学部教授)
- ◎巻数 全5巻+別冊1
- ◎体裁 B5判・上製・総2,140頁
- ◎別冊 解題・総目次・執筆者索引
- ◎推薦 高橋秀晴(秋田県立大学教授)



近刊予告

戦後の地方新聞・雑誌シリーズ5
東奥日報社刊「1946年～1949年」
月刊東奥 全4巻・別冊1
解題 中園裕・仁平政人
体裁 B5判 上製 総約1,400頁
予価 本体80,000円+税 全2回配本
2017年11月刊行開始予定【復刻版】

戦後の地方新聞・雑誌シリーズ

戦後の地方新聞・雑誌シリーズ1
石見タイムズ社刊「1946年～1958年」
石見タイムズ 全11巻・別巻1
解題 吉田豊明・井上厚史・道面雅量
体裁 A3判 上製 総約4,000頁
揃定価 本体360,000円+税 全4回配本
2014年12月～2016年5月刊【復刻版】
●推薦 山輝雄・内海愛子・庄司俊作・竹永三男

戦後の地方新聞・雑誌シリーズ2
四国新聞社刊「1946年～1950年」
四国春秋 全6巻・別冊1
解題 石川巧
体裁 B5判 上製 総約2,100頁
揃定価 本体108,000円+税 全2回配本
2015年11月～2016年9月刊【復刻版】
●推薦 坪井秀人・西川祐子・福岡良明

戦後の地方新聞・雑誌シリーズ3
新潟日報社刊「1946年～1949年」
月刊にひがた 全6巻・別冊1
解題 大原祐治
体裁 B5判 上製 総約1,724頁
揃定価 本体108,000円+税 全3回配本
2015年11月～2016年10月刊【復刻版】
●推薦 田中勳儀・坪井秀人・七北数人

三人社

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369

※図書館様・書店様へ
小社は少数数出版のため大取次の口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。



季節のことば

一つの季節を表現するにはたゞ一つの言葉だけでは足りない。他の季節では本質の表現は出来ない。選ぶべき一つの言葉を発見しなければならない。そして真意を正確に表現しなければならない。

日本人は自分の感情を正確に表現することを願う。本心を吐露しない習慣がある。そこに無理解、誤解が生ずる。目の前に対して遠慮したり、政府に対して遠慮したり、権部に對して遠慮したりして本心の感情を表現しない。

政治の面で経済の面で文化の面で全く束縛されて来た私達、いやつと頭へられた自由に對しても、私達の心を表現する自由だけは失ひたくなかないものである。自分の心を正確に表現する自由を失ふことは自分自身を失ふことである。

自由の語での根本は自分の心を正確に表現することの自由から出発しなければならぬ。然し、誰でも勝手にしやべり、勝手なことをするのではない。自分の自由を發表するためには自分自身を先づ感かなければならぬ。自分の心の正しい動機を基調として始めて自由を主張することが出来る。

自分の個性、明かに、正確に、正しく表現する努力、これによって新しい日本は築かれるのである。

石川達三

十一月號目次

表紙	福田豊四郎
扉繪	共川惠美(3)
季節のことば	石川達三(3)
地方都市	沙和栄一(4)
人物横切	治井 夫(9)
防犯座談會	(10)
随筆	廿世紀の文明……河上徹太郎(14)
	あれから二年……三風 將(16)
	源 能 記……柴田 果
歴と小説(あちらの話)……シヨウ・衣笠(18)	
戦時日記、カヌラ、談話で拾った話……(20)	
海の呼び聲(富田歌集)……小本正次郎(22)	
童謡の衆・郷土清原……(29)	
映 画 記 介………横山有雄雄(30)	
學校通り(本庄高安の巻)……本庄高安(32)	
讀者 文 藝………(33)	
附 録、編輯後記………(34)	
カトト、植村佐々木宗一郎・勝平得之	
渡邊浩三・山本正次郎	

『月刊さきがけ』復刻の意義と可能性

高橋秀晴 (秋田県立大学教授)

一九四五年一月から一九五〇年五月まで発行された『月刊さきがけ』(秋田魁新報社)。七〇年の時を隔ててこの雑誌を手にとることの意義は何か。

まず、室生犀星、青野季吉、石坂洋次郎ら近代文学史上不可欠の作家の知られざる寄稿が発掘され、研究が進むこと。たとえば、石川達三の「自由の総ての根本は自分の心を率直に表現することの自由から出発しなければならぬ。」(「季節のことば」、一九四六年一月月号)といった発言を、戦時下の「生きてゐる兵隊」筆禍事件や戦後の自由論争という文脈の中で捉えることで見えてくる問題は必ずある。

次に、武埴三山、富木友治、小島彼誰ら秋田にとって重要な文化人の動静が把握できる点。関係資料が乏しいだけに、『月刊さきがけ』に載っている情報は貴重である。農民文学の第一人者であった伊藤永之介と芥川賞作家の鶴田知也とが選者を務めた懸賞小説に当選した千葉治平が、後に「虜愁記」で一九六五年下半年直木賞を受賞することになる因縁なども興味深い。

さらに付言すれば、『月刊さきがけ』に映し出されている現象は秋田に閉じるものではない。それは、戦後における地方文化再興の一例と言えるのであり、とすれば、全五四号を、想像力を働かせつつあるいは補助線を引きつつ読むなら、敗戦のダメージから立ち直ろうとする地方、即ち「中央」以外の日本の姿を透視できることになろう。推薦する以前に私自身が復刻版を所有する日を心待ちにしている所以である。

秋田をスウスよめしらた

食糧事情憂ふるに足らず

石橋湛山

食糧事情の憂ふるに足らずは、戦時下の秋田県民の切実な願いを表現している。石橋湛山が、この切実な願いを、食糧事情の憂ふるに足らずと題して、秋田県民に訴えている。この切実な願いは、戦時下の秋田県民の切実な願いであり、戦時下の秋田県民の切実な願いである。

みよご繪
ゲハ マナ
文並 讀版
之 得 平 勝

五月十日の夜、福田豊四郎は、秋田県民の切実な願いを表現した。この切実な願いは、戦時下の秋田県民の切実な願いであり、戦時下の秋田県民の切実な願いである。

